

日佐戸 輝さん

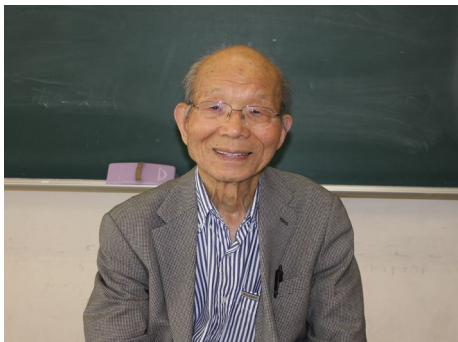
終戦当時:22歳

1923(大正12)年5月22日

千葉県野田市生まれ

所属:高射砲第115連隊

第18中隊(照空中隊)



●1945(昭和20)年5月25日、召集(二回目)

柏の中新宿いた高射砲第115連隊第18中隊(照空中隊)に入隊。7月、部隊が仙台へ移動・

●1945(昭和20)年7月10日午前0時頃、仙台駅で仙台大空襲に遭遇

7月9日早朝、仙台駅到着。兵器弾薬等各陣地へ搬出で一旦終り。その夜は警戒兵として駅に残った。仮眠していたら急に「起きろ！」と言われ「空襲だ!」。目を覚まして窓を見たら真赤っか。「うわあー」と思って、すぐ横に防空壕があったのでそこに飛び込んだ。

B29は何機編隊かで、第何派と順番に入って来る。編隊のすきまにちょっと空襲が止んだので出たら、どんどん燃えているのがすごい。

駅の消防隊は手押しポンプでやっているからとてもじゃないけど消火は不可能だった。やってるなあと思ったけれど、そのうち投げ出したのかいなくなってしまった。

休んでいた小屋にもどんどんどんどん火が移って来た。突然班長が移るということで貨物ホームへ行った。そこには軍用品が残っていた。

空襲が始まってから十分か二十分位したら静かになった。「もう終わりかな」と思って見ると、どンドン後から後から百何十機がぐるぐる回りながら爆撃してくる。上を見て「あれ」と思ったら焼夷弾がバーツと来た。すごい音がして屋根を突き破って黒いものが降ってきた。

「うわあー」と思って線路に飛び降りて、頭を抱えてじっとしていた。落ちるのが終わったかなと思って顔を上げると、周りの貨車に火が付き始めた。「これはここにいると危ねえなあ」と思ったので、向こうへ駆け出そうと思ったら、右足がずずずと引っ張るとついてくる。動き出そうと思ったら立てなかった。「あれっ?」という思いと、「やられたな」って思いと、いくつかあった。それで見たら右膝がぱっくりと。「ああーこれやられた!しょうがねえ」と思って、このままここにいたんじゃ焼け死んじやう、しかしどうするといっても動けない。這うにしても動けない。ちょっと顔色が変わったと思う。「あーだめかなあ」と思ったが、ともかく死ぬとか生きるとかは考えなかったけれども、これじゃだめだから、戦友がいるかもしれないと思って、「おーい!おーい!」と、ともかく呼んだ。

そのうちに、駆けて行く人がいたから、もう本当にできる限りの声を出して呼んだ。そうしたら燃えていて明るいから結構見えて、こっちにくるから「あっ!」と思って、「助けてくれ!」と言ったら同じ班の兵隊だった。「やられたのか、じゃあ」ということですぐに抱えて、その時に脚絆だと思っただけけれども、それをほどいて足の付け根をしばったと思う。四人で抱えて貨物ホームから離れて駅の外に出た。

駅表のデパートや町のほうはやられていたが、駅の裏のほうは何ともなかったもので、国民学校かわからないが、救護所になっているところに連れていかれた。

夜明けになると、担架を持ってきてもらって、病院へ行くということで移された。はじめは「やられたのか」とか「しっかりしろ」と言われれば「はい!大丈夫です」と簡単に出たんだけど、病院に入るころは「しっかりしろ」と言われても返事ができなかった。

宮城野原の陸軍病院についた。手術台に乗せられるとあとは軍医が切るだけだった。「切断はしないでくれ」とは言ったと思う。

手術が終わってストレッチャーに乗せられて部屋を出る時に、今切った足がおいてあった。あれ~と思ったけれど、あのときはウツきた。

あくる日に病室に軍医が来て、「あー、早く切ってよかったなあ」と言った。「とんでもない、俺は切りたくなかった!」と言おうと思ったけどやめた。後で分かったのは早く切らないとガス壊疽になって腐ってしまうということだった。この切断がその後の私の人生の原点になったんです。

(収録日:2013年5月17日)